

在宅での人生の最終章の過ごし方及び看取りのあり方 ～医療関係者の関わり方、親族のあるべき態度、 助け合い活動者の関わり方など～

提言

自分らしく人生の最終章を過ごすためには、

- ・ 本人の意思決定。
- ・ 家族を含めた地域コミュニティの
支え合い活動を、
今後すすめるべきである。

登壇者

【進行役】	花戸 貴司氏	東近江市永源寺診療所所長
	村松 静子氏	在宅看護研究センターLLP代表
	永井 康德氏	(医) ゆうの森理事長
	熊谷 美和子氏	(特非) たすけあい平田理事長

■ 寄せられた声から

- 花戸先生の本に感銘を受け、この分科会を希望しました。パネリストの方々からも皆さん同じ思いを感じました。一人でも多く少しでも多い地区で、自分らしい暮らし方ができる地域をともにめざしたいものです。
- 医療、住民の意識改革の必要性。死に向きあう覚悟を小さい頃から考える機会を持つ。

議事要旨 花戸 貴司氏

冒頭、日本の現状についての確認。

日本は超高齢社会から多死社会に突入している。しかしながら、医療資源は限られており、在宅医療・在宅看取りの推進が言われているが、現状ではまだまだ少ない。このような現状の中、人生の最終章においても、どのようにすれば本人が安心できる場所で生活ができるか、医師、看護師、生活支援者の視点から発言いただくことを説明した。

議論を始める前、「これから、どのような地域社会を目指すのか?」と、フロアに意見を伺った。

- ・ 入所できる施設をもっと作ったほうがいい?
 - ・ 皆が知恵を出し合って安心して生活ができる地域づくりを考える?
- 全員一致で、後者を選択した。

パネリストからの発表は以下のとおり

永井さん

医療者も国民も死に向き合えていない現状がある。がんであれ、非がんであれ在宅で支えることができる。人生の最終章の場面では、医療をつぎ込むよりも控えた方が楽に生活ができる場面が多いことを説明。また、看取りの数だけではなく、看取りの質を高める8つの提案も披露。

医療行為を「できない」ではなく、「やるかやらないか」、そのような選択を本人・家族とともに、共に考えながら支えることが大切であると述べられた。

熊谷さん

「たすけあい平田」の活動の報告。まさかのとき本当に頼りになるのは、遠くの親戚よりも近くの他人。そのよ

うな思いで住民同士が助け合い活動をしている。地域の中でお互いさまの応援団の輪が広がり、力を付けた住民が看取りの事例をいくつも経験した。

家族の力、医療の力、介護サービスの活用、助け合いの充実、地域住民の協力、どれも必要だと感じている。制度ではないお互い様の支援だからこそできることがあると述べられた。

村松さん

「人間は仲間の死をきっかけに人間らしい心を得た」その言葉を身にしみて感じることもある。

ACP・人生会議という言葉は、ただ単に人生の最終章を確認することではなく、今を主体的に生きる。そしてしっかりと死と向き合うことにほかならないと思う。今、私は自主逝(じしゅせい)という言葉をつくり、その人らしく輝いて生き抜くための支援を行なっている。私にとって逝く人は、皆さん、最強の教師でしたと述べられた。

花戸

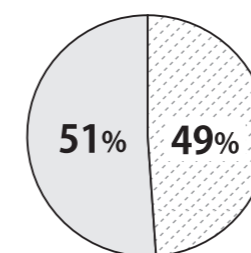
専門職同士の連携である Integrated care (垂直連携) と、地域の中で支え合う Community-based care を説明。両者のつながりが重要である。

まとめ

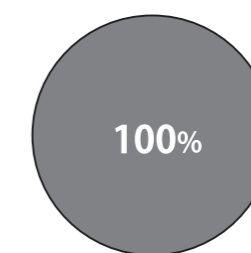
人生の最終章をどのように過ごしたいか本人の思いを地域を含めた支える人達で共有することが大切である。また、地域の中で独居、老夫婦世帯など家族の形が変わってきた。家族が離れて暮らすからこそ、地域と家族のつながりを大切に地域コミュニティの中で支える活動が大切であることを再確認した。

アンケートの結果 参加者概数: 82名 回答者数: 74名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

